

## シンポジウム総合コメント 2

鈴木 正 崇

今回のシンポジウムの意義の一つは、「宗教」の歴史地理学ではなく、歴史と地理から「宗教文化」に迫る観点を正面に出したことにあろう。主題は、講集団、信仰圏、神社、風水、墓と葬制で、地域社会の「宗教文化」を考察する多様な視角が用意されていた。そもそも「宗教」とは、西欧社会から輸入された概念で、「超自然的な存在」「人知を越える」「聖なるもの」への観念や行為を「宗教」と定義することや、教義・教団・儀礼を有する「成立宗教」という概念の提示は、キリスト教がモデルであり、非西欧社会には違和感がある。非西欧社会を意識した有力な定義の提示もあるが<sup>1)</sup>、「宗教」概念は成立しないという主張も根強く<sup>2)</sup>、「宗教」概念の普遍性は永遠の問いである。日本でも同様に、近代では仏教や神道を宗教とする見解が定着したものの、初詣や盆の供養、先祖祭祀や地域の祭りは「宗教」であるよりは生活慣行と考えられている。民衆は「宗教」は怖いとか騙されるという否定的イメージで語り、「新宗教」を漠然と意識する傾向がある。学問上の「宗教」の定義と、民間で受容された「宗教」とは食い違う。しかし、現代社会での「宗教的なるもの」や「靈性」、癒しへの関心の高まり、あるいは民族紛争に伴う宗教対立を見ると、「宗教」の研究は重要性を増しているようにも思える。一方、宗教地理学は、「宗教」を自明視したためにマイナーな分野と見られがちであったように見える。「宗教文化」は最上のタームではないが、現代の事情も視野に入れ、狭い意味での「宗

教」に囚われない、歴史性を取り込んだ地理学の文化研究が展開することを期待したい。以下、各発表へのコメントを行い、今後の課題についての個人的な見解を述べることにする。

小野寺氏の発表は、講集団の変化を伊勢講の文書（寛政期以降）の解説から試みた堅実な研究で、村落組織の変容や近世の宮座祭祀との関連から歴史的变化の動態を明らかにしている。地域経済の変容が大きな要因で、明治中期と高度経済成長末期の二度起ったという。講集団に関しては、近世末期の貨幣経済の浸透と流通システムの整備による経済的上昇という要因を重視し、「近世的形態」を強調した方が、明治以後との連続性を説得的に論じることが出来たと思われる。伊勢講の担い手の多くが商家や漁家など非農耕民で構成され（原の町は農家）、講親が世襲で特権的な宮座風の性格を持つこと、講田を耕させた上がりや祇園講に援助するような階層制が組み込まれていたこと、伊勢講以外に多様な講が存在し村落の枠組みよりも講のネットワークで社会が構成されていたことなどが注目されよう。後背地を含めての市場システムが広がっていたのであろう。講の機能としては、娯楽性を求め、社交の機会とし、社会階層の維持を図る一方で、女性が嫁入り前の「世間を知る」旅として同行するなど開放性があったことの指摘が面白い。大きな変化は、明治26年の規約改正に見ることができ、世襲制から交代制へと変化して、講親の力が弱まり、「近代の経験」との拮抗が続く。その背景に

経済構造の変化と近代戦争とナショナリズムの高揚による価値観の変化があるだろう。その後も講は高度経済成長期末期まで継続する。連続性の原動力は講集団で、東日本とは異なる社会構成が見られる。民俗と歴史を結ぶ研究で、経済だけでなく、社会的・文化的要因の洞察が深まれば、動態的な考察となる。

松井氏の発表は、研究動向を整理して、宗教地理学とは「宗教現象の地理学的解明を目的とする学問」で、文化地理学の一分野と指定する。宗教学に占める宗教地理学の位置は相対的に低いと、地理学者の成果は多いとして、風土・自然環境、都市・村落景観と宗教、巡礼・観光・聖地、宗教の分布・伝播と空間構造、の4つに類型化する。但し、関心は、分布と伝播に基づく空間構造としての信仰圏研究にある。評価すべき点としては、民俗学の山岳信仰や霊山の信仰圏の研究を神社の講集団や祭祀組織に適用して、歴史的展開ではなく、同心円状の圏域に応じての担い手の集団や組織の相違や、神観念の質的な差異を明らかにした点である。笠間稲荷や金村別雷神社を事例として、豊富な資料に基づき、統計処理、グラフ化、地図化を行い、伝播と分布が明示されて説得力がある。しかし、二つの事例は共に同じ茨城県で偏りがあり、信仰圏を通じて空間構造を明らかにするという一般論の構築は十分とは言えない。総じて信仰圏研究は静態的であり、類型化された圏域を設定した上で何が言えるのかが問われる。金村別雷神社の場合、第1次信仰圏では「鎮守神」、第2次信仰圏では「利益神」として受容されるというが、抽象度が低すぎて差異がわからない。信仰の内部文脈に関わる神観念と外部文脈に関わる神観念という違いかもしれないが、説得力には欠ける。信仰圏には、地域での受容にあたって、他の神社祭祀や信仰との関係を通して、或いは基盤となる社会集団との関連を通じてどのように読み替えられ

再創造されたかという動態的考察が必要である。問題点は圏域内が類型化で均質化されることであり、数値化と図化による量的調査の単純化を、質的調査で相対化すべきである。同心円の構成は中心一周縁の発想に偏り、それ以外の見方が狭まるという問題点もある。地域の圏域区分は、目的に至る過程に過ぎず、空間構成の意味の読み取りこそが課題であり、単なる受容を越えて、創造・想像、或いは矛盾・対立を浮かび上がらせる必要がある。また、宗教文化を扱う以上、価値意識や意味の問題は避けて通れないが、稲荷や雷神の内容への踏み込みや自然観の再構成や現代化には踏み込まない。雷神信仰に東京電力が関わるなど現代的テーマも入れて動態化すべきであろう。総じて概念規定の甘さが目立つ。

岡氏の発表は大社とその周辺の絵図の読み取りである。『出雲国風土記』の舞台であり、古代にも遡り得る歴史の変遷の諸相を明らかにして興味深い。近年、参詣曼荼羅や絵解きへの関心が高まり、建築や図像などに関連させて、絵図の多角的な読み取りの研究が盛んになった。今回の発表は、面白さの点では中世史家の解釈<sup>3)</sup>には及ばないが、地域に根ざした絵図の丹念な考察であった。絵図が同時代の「境界」「四至」を描き出して、境界に強い関心を寄せている点を深く掘り下げて考えるべきであろう。また、宗教施設や門前町を描いているので、宗教的権威の提示のあり方の考察も重要である。平野部に「殺生禁断」の禁忌が課せられ、聖性を付与していることは、絵図読解のポイントとなろう。絵図と文書史料との照合は当然だが、描かれなかったものを浮彫りにして、その理由を追求する必要もある。その意味で、本殿の背後に聳える神聖な山で禁足地の八雲山の描き方の変遷への注目が興味を惹いた。鎌倉期の絵図では東方の弥山が強調され、大社には巨大柱が描かれて、古代性を残していた。その後の寛文4年(1664)頃の絵図では八雲山が強調

され、天保12年（1841）の『天保杵築惣絵図』では八雲山が中心で弥山は消え、二つの中心地が一つに収斂して、八雲山の聖性の絶対化へ向かう。弥山の標高は約500メートル、八雲山は100メートルだが、八雲山が大きく描かれ、実測よりも象徴性が重視されているという。リアリティとシンボルの狭間に絵図があると言える。但し、変化の要因として、出雲では神仏習合が早い時期に崩れて、神社勢力が強まって弥山が描かれなくなったことを強調すべきであった。大社の北東の鬼門には古刹の鏝淵寺（天台宗）があり、かつては大社の別当寺で、摩多羅神を祀る常行堂があり、比叡山と同様に町の鬼門抑えの意味があったと思われる。弥山は須弥山の意味で、仏教的世界観に基づく宇宙の中心とされ、各地の修験の霊山との共通性がある。一方、天保期の絵図には、鎌倉期への「追慕の意識」があって往時を再現する復古意識があるという。壮麗な神社の再現は国学の隆盛と関連するかもしれない。中国地方では近世中期以降、吉田神道が浸透し、近世後期には国学も展開して、神社祭祀から仏教的要素が消滅した。各地の伝承は出雲神話に合わせて再構築されている。絵図の背景として、寛文年間、同5年（1665）に幕府が諸国の神職に「諸社禰宜神主法度」を下して死者儀礼への関与を禁止したこと、天保年間は国学思想の高まりを考慮すべきであろう。変革期に、「神域」や門前町の領域を描いて、境界確定を行ったことは、社会秩序の再編とも言える。一方、絵図の焦点は宮内村で、千家と北島の国造家以下の社家屋敷があり、200年間にわたり社家屋敷・海岸部・内陸農村部に変化がないという安定性を保つ一方で、市場村の街区の拡大は著しく、貨幣経済の確実な浸透が変動要因と推定される。明治維新以後、伊勢の天照大神を祖神とする天皇家が浮上する国家政策の進展に伴って出雲は勢力を失うのであり、天保12年の絵図は明治の変革直

前の繁栄の姿とも言える。地図や絵図の境界の描き方に政治性や権力性を読み込む考察は、国民国家の生成にも結びつく<sup>4)</sup>。

渋谷氏は風水の原理学派と形勢学派の二大流派を概観した上で、韓国を形勢学派に位置付けて歴史文献から風水を読み込む。釜山の地下鉄事故が亀岩の風水と絡むなど現代の話題も取り込む。元々、風水は中国の漢族の文化で、風水に凝ると長生き出来ないとか、争いや災いの源となるなど、こわいというイメージがあり、現世での勢力争いの理由づけにも利用される。韓国では日本統治時代に、朝鮮総督府の建物が竜脈を壊したとか、竜脈切断の為に鉄棒を入れたという話がまことしやかに囁かれていた。日本では、琉球文化圏は別として、陽宅風水として受容されて家相図に展開し、インテリア風水となった。1990年代には、精神世界、癒しやヒーリング、スピリチュアリティの流行と共に一般に広がったが、墓に関わる陰宅風水は受容されていない。陰陽五行思想は日本では古代以来、陰陽道として定着し、王都の立地や意味付けに利用された。五行の民間受容では中国地方の備後や備中の神楽で神懸かりに先立って舞われる王子舞（近代では五行祭）が興味深い。東西南北の四方位に位置する四人の王子と末子の五郎の王子が争い、最後に五郎を中央の神として祀り鎮める内容である。五行を取り込んだ土公祭文に基づき、地霊を王子に形象化して鎮める。このように東アジアの各地で个性的な展開をした風水の比較は今後の課題で、環境観や自然観を考え直す手がかりになるであろう。中華文化圏でも、「華南とその周辺」（香港・台湾・沖縄）と「朝鮮」は様相を異にし、方位観に特徴がある「琉球文化圏」と陽宅風水に特化する「日本（ヤマト）」という違いがある。儒教による祖先祭祀の受容、朱子家礼の定着度、父系制か双系制かという社会的基盤など、様々な差異との関連が興味を引く。

稲田氏の発表は墓地と葬制という現代的な

テーマである。イギリスの地方都市の事例だが、土葬から火葬への移行、墓の変化などに伴い、死者に関わる事象が目に見えない世界に追いやられて、日常生活からタブー視される傾向は東アジアでも顕著である。死者のストック化への対応が問題となる。ファルマーの事例では、教会墓地が一般的であったが、共同墓地への埋葬が1897年に初めて出現し、1900年以後は恒常的になり、教会墓地と拮抗するという。教会墓地への埋葬は1910年以後は少数となり、大半が共同墓地に移行する。この点に関しては、火葬への変化だけでなく、第一次世界大戦という国民単位の戦争による大量の死者の発生で、「無名戦死者の墓」という教会墓地以外の公共墓地が出現したことの影響があるのではないか。第二次大戦後は火葬率が高まり、更なる変化が起こる。その要因として、①都市での衛生思想の普及、②慣習法から実定法への移行、③近代戦争の「戦死者」という大量死の発生への対応、④国家の関与による死の観念の変化、⑤墓地運営が教会から外部団体へと外部文脈に変化したこと、⑥死の観念が変化して、人間による操作が可能になり資源化に向かう、⑦死をめぐる文化的ヘゲモニーを都市が掌握する、⑧徹底した火葬化の普及で教会離れが加速化、⑨家族の形態や意識の変化、などが挙げられよう。総じて、死の外部文脈化が起こる。80年代以降に急速に火葬が普及し、キリスト教離れや教会離れが進行し、墓地にも行かなくなる（特にプロテスタント）。葬送に「人権」の尊重の考え方が導入され、葬式教会や葬式キリスト教からの脱皮を図るなどの新しい動きも生じた。日本でも葬式仏教批判から仏教再生を求める動きがある。墓という場所、死者の扱いは、文化に根ざす問題で、宗教の存亡に関わる。現代では、死者の遺族への癒しなど、癒しの文脈で変化の兆しが見え、葬制にはボランティア団体が多数関与して、「生きた証し」を求める新しいメモリアリズムへ

と変貌させ、個性ある死にざまが求められている。

1990年代以降、空間論的転換という現象が起こり<sup>5)</sup>、カルチュラルスタディーズの影響もあり、空間の消費、空間の言説や表象、ジェンダー空間の導入、空間の資源化の考察などが進んでいるが、歴史地理学では試みられていないようである。流行を追いかける必要はないが、空間の考察には、機能と構造、表層と深層、形態と意味、表象と言説、テキストとパフォーマンスなど多様な観点が必要であろう。その前提条件は、①対象を社会的・歴史的文脈の中で理解する、②当事者の意図や観察者の状況への関与を重視する、③厚みのある日常実践の社会的過程をみていく、であろう。研究者には、空間をめぐる動態的な動きをどのように記述するかという問いもある。従来は空間をストックと見る傾向が強く、完結性が意図されていた。例えば、構造主義や記号論の影響を受けて、空間のテキスト化、記号表現としての空間という見方では、集落や住居の空間形態を住民の無意識のモデルと結合した集合表象と見なす<sup>6)</sup>。村落空間を小宇宙とするコスモロジーの考察もこれにあたる<sup>7)</sup>。儀礼も、実践を通じて、歴史をテキストの集積として空間上に具現化する。これに対して、新たな動きは、空間をフローと見て、非完結性を強調する。空間がいかに言説化されて語られ表象されて流通していくかに注目する。言語実践が空間を構成する力を持つという視点である。大峯山の女人禁制では、多様な言説が生成され、国立公園や世界遺産、フェミニストなど外部文脈の関与で、空間の政治化が生じている<sup>8)</sup>。空間は客体化され資源化され、操作の対象となる。現代では法則の検証よりも事例の解釈を探求する傾向を重視すべきであり、宗教的観念や象徴を媒介とする人間の実践で独自の空間が生成かつ構築されるという思考が必要である。

(慶應義塾大学文学部)

〔注〕

- 1) C. ギアツ著, 吉田禎吾他訳「文化体系としての宗教」『文化の解釈学 I』, 岩波書店, 1987 (原著1973)。
- 2) T. アサド著, 中村圭志訳『宗教の系譜—キリスト教とイスラムにおける権力の根拠と訓練』, 岩波書店, 2004 (原著1993)。
- 3) 黒田日出男『境界の中世 象徴の中世』, 東京大学出版会, 1986。
- 4) W. トンチャイ著, 石井米雄訳『地図がつくったタイ—国民国家誕生の歴史』, 明石書店, 2003 (原著1994)。
- 5) H. ルフェーヴル著, 斎藤日出治訳『空間の生産』, 青木書店, 2000 (原著1974)。D. ハーヴェイ著, 吉原直樹監訳『ポストモダニティの条件』, 青木書店, 1999 (原著1990)。
- 6) Duncan, J. S., *The city as text: The politics of landscape interpretation in the Kandyan kingdom*, Cambridge University Press, 1990.
- 7) 鈴木正崇『祭祀と空間のコスモロジー—対馬と沖縄』, 春秋社, 2004。
- 8) 鈴木正崇『女人禁制』, 吉川弘文館, 2002。